



学校だより

6月号

令和 5 年 6 月 1 日
足立区立舎人第一小学校
校長 濫谷 あゆみ

脳のくせ

本年も 4 月に例年通り区の学力調査が行われました。

さて、私たちは、自分たちが受けてきた教育が最も学習効果が高いと無条件に信じ込んでしまいがちですが、最近、先進的な企業では「脳の認知学」などの研究成果を踏まえて人材育成の方法を見直したり組織づくりをしたりしているのを知り、学校や家庭における子供たちの学習のあり方も、本当にいまのやり方が最善なのか見直してみる必要があるのではないかと考えています。

ヤナ・ウェンスタイン著「Understanding How We Learn」という本は、人間の脳が物事をどのように記憶し、定着していくのか、アメリカの学生を対象に実験した結果を基に、学習内容を定着させるための 6 つの有効な方法を説明しています。日本では、学校教育の中で児童を 2 つのグループに分けて学習効果を実験するなどということは認められていないので、これはとても貴重なデータです。この実験で示される、いわゆる人間の「脳のくせ」を知って学びをデザインしていくのと、知らずにただ学習していくのでは大きな違いが出てしまうと思います。

この本に示されている 6 つの方法の中で、私が最も取り入れたいと思っているのが「検索練習」という手法です。学校で使っている言葉でいうと「ふりかえり」に近い考え方です。教科書や授業中にとったノートなどを見ないで、学んだ内容を思い出すことで記憶効率を高めていきます。

ここで注意しなければならないのは、これは、宿題とは違うということです。宿題はすでに問題が与えられているのですが、検索練習では、子ども自身がそういう宿題の問題などを頼りにせず、自分の頭で思い出す(自分の脳の中から検索して取り出す)ことが、一番重要なポイントなのです。埋もれそうになっていた脳のたくさんの情報の中から自分で引き出してきた情報は、短期的な記憶から長期的で意味のある記憶へと変換されるそうです。(宿題には、家庭での学習習慣を付けるなどの教育効果がありますので、宿題はやらなくても良いということをごここで言いたいわけではありません)

5 月 15 日の児童朝会で、子どもたちにこの話をしました。家に帰って今日学習したことを家の人に話したり、ノートに書いたりするだけで、そういうことをやらなかったグループより 23 ポイント、評価テストで点数が高く取れたとの実験結果が示されています。

本校の教育活動においても、この「脳のくせ」を上手に活用して学習を進めていきたいと思っています。そしてご家庭でも、お子様が家に帰ってきた時、どんな学習をしたのかお話を聞いていただくと、子どもたちの学びの定着に大きくつながります。学校とご家庭で協力して、子どもたちの学びを支えていきましょう。